

iii) 一般に、風速の弱い所では風向のばらつきが大きく、強い所では小さくなる傾向がみられる。

iv) 谷壁を吹き上がる風は、尾根に近づくにつれ、風向が尾根に對し直角となるように変化する。

v) 風影斜面、谷底は全般的に風速が弱い、とりわけ、風影斜面上部は最少となり地形的影響が著しい。一方、風速の最大値は尾根上に現れる。

vi) 谷の中における風向、風速の分布は夏、秋、冬ともほぼ同じパターンを持つ。

vii) 風向および風速分布の観測結果と偏形樹から推定した流線図とはほぼ一致し、霧ヶ峰の各月の最多風向が年間を通じ一定であることから考えて、偏形樹からこの地域内の年間の卓越風向の傾向を読みとることができる。

今回の調査にあたり、筑波大学吉野正敏教授に終始ご指導いただいた。また法政大学田淵洋助教授には多くの貴重な助言をいただいた。夏の観測では諏訪市教育委員会、および茅野慶次氏ほか多くの方々のお世話になった。ここに深く感謝の意を表します。

#### 文 献

- Aulitzky, H., 1955: Über die lokalen Windverhältnisse einer Zentralalpinen Hochgebirgs-Haugstation, Arch. f. Met. Geoph. Biokl., **13**-6, 353-373.
- 羽田野誠一・馬部正久, 1963: 霧ヶ峰の周氷河地形について, 地理学評論, **36**-12, 50.
- 永見順一, 1959: 氷河と氷河周縁の地形, 三野与吉編, 自然地理学研究法, 朝倉書店, 134-145.
- 岩塚守公・守屋以智雄, 1965: 霧ヶ峰高原の無土器文化遺跡とそれに関連した若干の古気候地形学的

- 問題, 地学雑誌, **74**-5, 1-6.
- 門脇和博, 1965: 長野県霧ヶ峰付近の構造土に関する研究, 駒沢大学卒論,
- 小池春夫・武居 守・両角昭二・斉藤保人・五木省二・北沢和男, 1972: 霧ヶ峰の構造土——流土階段について, 第四紀学会講演要旨集 **1**, 20.
- 三野(石川)与吉, 1972: 縞模様地面の二, 三について, 地域研究, **13**-2, 12-26.
- Nägeli, W., 1971: Der Wind als Standortfaktor bei Aufforstungen in der subalpinen Stufe, Mitt. schweiz. Anst. forstl. Versuchswes., **47**, 33-147.
- 西村昭二, 1961: 日本の構造土現象の意義, 辻村太郎先生古稀記念論文集, 215-222.
- 奥舎憲雄, 1970: 霧ヶ峰高原の構造土, 地理学評論, **43**-7, 407.
- 大和田道雄・吉野正敏, 1971: 石狩平野の卓越風の分布について, 地理学評論, **44**-9, 638-652.
- 田淵 洋, 1973: 周氷河地形による卓越風向の推定方法について——霧ヶ峰を例として, 気候学研究, **13**, 51-57.
- 立石由己, 1969: 積雪分布に及ぼす風速および微地形の影響, 地理学評論, **42**-8, 527-532.
- 吉野正敏, 1954: 尾根・谷斜面・谷底における風(1), (2), 地理学評論, **27**, 472-484, 705-718.
- Yoshino, M.M., 1957: The Structure of surface winds over a small valley, Jonr. Met. Soc. Japan, **35**, 184-195.
- Yoshino, M.M., 1958: Wind speed profiles of the lowest air layer under influences of microtopography, Jonr. Met. Soc. Japan, **36**, 174-186.
- Yoshino, M.M., 1964: Some local characteristics of the winds as revealed by wind-shaped trees in the Rhône Valley in Switzerland, Erdkunde, **18**-1, 28-39.

#### —会員の広場—

### シンポジウムの裏方の苦労

昨年秋のシンポジウム(冬の低気圧)は、国鉄ストにもろにぶつかってしまった。世の中、万事がうまくいくものではないらしいのことは長年の生活体験で十分心得ているつもりだったが。

ほんとにストはやるだろうか、やるような素振りできりぎりの線までもってきてスト中止。過去の国鉄ストには、その例が多かった。今度もその期待をもつのも至極当然で私もその一人だった。

日延べになれば、開催通知の郵送、会場の借用、講演者との交渉など全てやりなおさなければならない。緊急に理事会は開けないし、管区气象台の研究会とペアで計画したのでその方との兼合いもある。12月に入れば大雪で交通機関のストップや乱れも考えられる。

とにかく、東京からも情報を取捨し、分析して、常任理事、幹事とも相談して延期を決めたが、それに至るまでの数日間、それ以後の数日間というものは全く大変だった。

幸い延期してシンポジウムはうまくおこなわれたが、裏方はしんどい。(札幌管区气象台 浅野 芳)